

国際会議報告

IAPS 11, 3rd Japan-U.S. Seminar そして ICAP 12

窪田陽一*

Yoichi KUBOTA

1990年7月は、人間と環境の相互作用、特に環境心理学 (environmental psychology) や環境行動研究 (environmental-behavioral research) を軸に研究を行っている者にとって忙しい1か月だった。著者は表題に掲げた会議のいずれか一つに出席できればよいと思ってそれぞれに応募したのだが、幸か不幸かすべての会議で論文を発表することになり、スライド写真やOHPシートのファイルを抱えて文字どおり東奔西走すること相成った。

1. IAPS 11

まず IAPS 11 (the 11th Conference of International Association for the Study of People and their Physical Surroundings=第11回国際人間環境研究会議)。

隔年開催のこの会議は、もともとはイギリスにおいて、建築系の教育に心理学を導入する必要性を痛感した研究者達が始めたものだったが、回を重ねるごとに盛んになり、都市計画や景観等の隣接領域からの参加者が増えている。

今回はトルコ共和国の首都アンカラの郊外にある中東工科大学 (Middle East Technical University=METU) を会場として、7月8日から12日まで開催された。今回の全体テーマは“Culture/Space/History”で、お国柄か参加者数や参加国数等のデータは発表されなかったが、延べ300人以上は出席していたと思われる。日本からは著者ら7名が参加した。論文発表のほかにポスターセッションとワークショップ、そして会期中毎朝必ず基調講演が行われた。

当日になってからの発表キャンセルが結構あり、実際に発表された数は正確には不明だが、プログラムでは計168編の論文が審査を通過している。論文は主題ごとにシンポジウムとして分類されて発表が行われた。またシンポジウムの中には企画そのもの、すなわち誰が中心的な企画責任者となりどのようなテーマのもとに誰々がどのような論文を発表するのかという内容構成全体が審査の対象とされ開催を認められたものも多かった。いわばシ

ンポジウム企画者の研究者としての国際的な信頼度が問われ、自分の設定したテーマに関心をもつ各国の研究者を募って発表論文の内容を調整することに始まり、当日には司会進行と発表者、討論者の3役をこなすことが要求されるものである。

プログラムに掲載されたシンポジウムは次のとおり。

- Space and Cultural Identity
- Spatial Design and Planning for Special Subcultures
- Vernacular Identity in Housing Environments
- Landscapes and Cultural Dimensions
- Paradigms to Understand Space
- Culture and History of Space and Spatial Studies
- Policy Implications I, II
- Developing Senses of Urban Culture and Urban Planning
- History and Culture in Spatial Studies (Settlement Scale)
- History and Culture in Spatial Studies (Neighborhood Scale)
- History and Culture in Spatial Studies (Urban Scale)
- Modern versus Traditional Spaces
- Culture and Recreation Environments
- Interpretations of the Past
- Future Paradigms in Environment Behaviour Research
- Research in/on/into Education I, II
- Paradigms: Using the Past to Explain the Present
- * Historical and Cultural Continuity in Open Space Planning and Garden Architecture
- Social Production and Transformation of Built Forms
- Cultures of Work Environments
- Paradigms: Culture/Space/History I, II
- Cultures of Housing Environments
- Cultures of Architects
- Human Development and Environmental Culture

*正会員 工博 埼玉大学助教授 工学部建設工学科
(〒338 浦和市下大久保 225)

- Cultures and Histories of Housing in Transformation
- Space and Art
- Roots and Houses

日本の街路空間における庭園的な景観整備の動向について著者が論文を発表したのは*印を付した企画シンポジウムだが、訪日経験のない聴衆への風土的な背景説明だけでも時間を要し、本質的な討議に踏み込めず歯がゆく感じた。むしろ彼らは異質さに戸惑ったのかもしれない。

会議の事務局スタッフはすべてMETUの建築学科の教官と学生で、参加登録等の情報管理はワークショップで行われていた。少人数で手際よく事務をこなす経験を積んでいるからだろうが、郊外にリゾート施設をもつほどに国から優遇されている大学だからこそかもしれない。

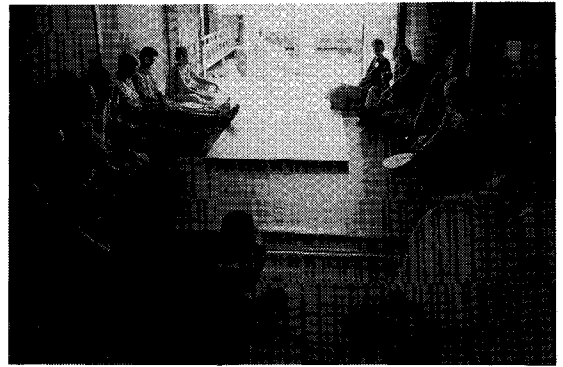
次回IAPS 12は、1992年7月11～14日にギリシャのテッサロニキ・アリストテレス大学が主催校となって開催される。全体テーマは“Socio-Environmental Metamorphoses: Builtscapes/Landscape/Ethnoscape/Euroscapes”である。欧州統合が景観にもたらす影響を強く意識していることがよくわかる。参加希望者は下記宛に問い合わせられたい。なお論文概要の締切は1991年9月10日である。

IAPS 12 Secretariat
School of Architecture
Aristotle University of Thessaloniki
P. O. Box 1641
Thessaloniki 54006, GREECE

2. 3rd Japan-U.S. Seminar

次に、3rd Japan-U.S. Seminar (第3回日米セミナー)。もう少し正確に表記すれば、the 3rd Japan-United States Joint Seminar on Environment-Behavior Researchとなろうか。これは1980年9月24～27日に東京の日本大学文理学部で第1回が開催され、1985年10月6～9日にアメリカ合衆国のアリゾナ州ツーソンにあるアリゾナ大学で第2回が開催された不定期のセミナーである。

このセミナーは日本学術振興会とアメリカのNational Science FoundationのJoint Sponsorshipを受けて開催されたもの(2回目は日本側参加者は自弁)で、原則的に非公開である。いわゆる論文発表というよりも少人数の席上で自分の考え方を説明し、密度の濃い議論をすることが目的だからで、招待されたスピーカーとオブザーバー合わせて数十名だけが、数日間テーブルを囲み朝から晩まで同じ部屋で意見を交換することを主眼としている。



写真一 伝統的町屋、吉田彦次郎邸での討議風景

第1回目以来中心的なメンバーは変わらないため、共同研究も生まれており、また専門分野の異なる研究者が忌憚なく意見を交換できる学際的な研究会である。特に日米の環境設計の考え方や行動心理の異同について、比較文化的視点から考察を深めるといことが今回の主旨であり、実際に日米比較に焦点を絞った研究も多かった。

ところで最近、旅費の節約の意味も含めて大規模な国際会議の日程の前後に関連領域に関する小会議が周辺の都市や国で開かれることが多い。学際的な大会議の場合、個別の専門領域に関するシンポジウムやセミナーが衛星会議として併行的に開催されることも少なくない。

今回のセミナーも、次に紹介するICAP 12 (the 12th International Conference of Applied Psychology)の環境心理学のセクションに参加する人々が多かったため、場所も同じく京都にして、7月19、20日の2日間にわたって開催された。初日は慈照寺銀閣にほど近い白沙村社を、2日目は京都大学近くの京大会館を会場とし、京都の町並みや町屋の現地見学においても討議を行った(写真一)。

セミナーは以下のような5つのSessionに区分され、日米の研究者が交互に発表を行った。これらの区分は後述するEDRAの大会におけるものに準じている。

- Work and Learning Environment
- Behavior and Safety
- **• Public Space and Landscape
- Theory Building
- Housing and Family

論文発表者は日本から13名、アメリカから10名であり、このほかにオブザーバーとして27名(うち7名は留学生、2名はアメリカからの同伴者)が参加した。討議内容はきわめて多岐にわたり、アメリカの研究者同士による口角泡を飛ばさんばかりの白熱した議論を目の当たりにした場面では、学際領域の幅と奥行き(底?)を実感させられた。環境を計画し設計する立場の人々は本当に人間の心理や行動を理解しているのか、という問題

の核心を突いた厳しい指摘をめぐる議論は、この報告記事で紹介するさまざまな会議で常に交わされるものである。

著者が日本の都市空間における自然的景観構成要素の取り入れ方について発表を行った Session (**印)でも、自然環境と都市環境の関係についての人間の認識のあり方を比較文化的視点から考察した発表が集まり、主客二元論的合理主義の思想から脱却した新しいパラダイムの構築に関心を寄せる人々の興味深い発言が相次いだ。

今回はアメリカで開催することになっているが、その時期や場所については未定である。おそらくメンバーや討議方式、テーマ等について改めて見直すことになるだろう。しかし個人的なつながりの上に成り立っているこのようなセミナーは、日米の知的な相互理解の場として重要な意味をもっている。是非とも継続していきたい。

このセミナーの記録は、3回ともプロシーディングスとして刊行されており、有償で入手することができる。関心をおもちの方は下記宛にお問い合わせ頂きたい。

〒113 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学工学部建築学科 高橋鷹志教授研究室内
人間・環境学会事務局 TEL (03) 3812-2111

3. ICAP 12

最後に ICAP 12. これは国際応用心理学会 (IAAP = International Association of Appplied Psychology) が主催して 3 年ごとに開催されている、数千人が参加する大規模な国際会議である。日本での開催は初めてであり、京都郊外の宝ヶ池にある国立京都国際会議場で 7 月 22 日から 27 日まで開かれた。会議の規模が前述した 2 つのものよりはるかに大きい (B5 版のプログラムだけでも 200 ページ以上もある!) ため、その全貌を紹介することはとてもこの紙面ではできないし、またその必要もないだろう。ただ応用心理学といっても人文社会的な問題ばかりではなく、土木計画の分野に深くかかわる部門として、環境心理学、交通心理学、人間工学があり、心理学者以外の参加も少なくなかった。設置された部門は以下のとおりである。() 内の記号と数字は、S* = シンポジウムの数、K* = 基調講演の数を示しており、またおのおのポスターセッションがあった。

- Organizational Psychology (S 16, K 5)
- Psychological Assessment (S 11, K 3)
- Psychology and National Development (S 5, K 2)
- @ Environmental Psychology (S 10, K 2)
- Educational, Instructional and School Psychology (S 11, K 2)
- Clinical and Community Psychology (S 9, K 2)
- Gerontological Psychology (S 3, K 1)

- Health Psychology (S 7, K 1)
- Economic Psychology (S 6, K 1)
- Social Psychology (S 12, K 2)
- Ergonomics and Human Factors (S 5, K 2)
- Traffic Psychology (S 5, K 2)
- Psychology and Law (S 4, K 1)
- General Psychology (S 14, K 5)

著者は@印を付した部門の中で、IAPS 11 の場合と同様に、景観研究者であるアメリカの知人が企画した “Meaning of Home and Garden” というシンポジウムに加わり、日本の街路にみられる私的な園芸行為について論文発表を行った。ただ企画者と司会進行役が帰国便等の都合により中座せざるを得ない時間帯にプログラム上配置されてしまったため、途中から座長を引き継ぐ羽目となった。

同じ部門の基調講演者の一人として、日米セミナーにも参加したアリゾナ大学の Ervin Zube 教授が招かれていた。Zube 教授は 1975 年に “Landscape Assessment” という重要な書物を編集したことで知られ、アメリカにおける景観研究の多面的展開を促進した人である。講演内容は、過去数十年間の景観研究の動向を振り返り、今後の研究課題の枠組みを提示したものであり、世界的なボーダーレス社会化、地球規模の環境問題の発生等の影響を景観の面からとらえることを示唆していたのが印象的だった。

余談になるが、国立京都国際会議場のスライド映写機器は開館当初から使われている 20 年は古かろうといういわゆる押し出し式の「幻灯機」だったため、通常の国際会議では常識的な定番であるコダックのカラーセル・マガジンを持参してきた海外からの参加者には大いに不評だった。ハイテクで世界をリードしているはずのわが国にしては実にお粗末な状態である。些細なことのように思われるかもしれないが、会議運営に対する評価はこういうところへの配慮が行き届いているかどうかにも左右されるものであり、基本的な設備投資は怠るべきではない。国際会議場に限らず大学についても同じことがいえ、そうでなければ国際化の時代に対応できるはずもない。

4. IAPS+EDRA+MERA+PAPER

環境心理学や環境行動研究に関する学際的な学会は、ヨーロッパ系研究者を中心とする IAPS、北米系中心の EDRA (Environmental Design Research Association)、わが国の MERA (Man-Environment Research Association = 人間・環境学会)、オーストラリア・ニュージーランド系の PAPER (People and Physical Environment Research) の 4 団体があり、相互に会議参加上の特典措置等の協力を行っている。EDRA は毎

年春頃に大会を開催しており、IAPS 同様非会員の参加を歓迎しているが、MERA と PAPER は今のところローカルな会合にとどまっている。

今回の IAPS 11 では会期中の 7 月 10 日に 4 団体の合同シンポジウムが開かれ、研究動向の総括的報告がなされた。今のところ不定期だが、この合同シンポジウムは 1986 年以来 IAPS または EDRA の会期中に開催されることになっており、その拡大と継続的開催が期待されている。

日本という独特の気候風土と文化的伝統の上に展開されている環境と行動心理に対する関心は高く、この合同シンポジウムを拡大した連合的な国際会議を開催してほしいという要求は、年を追うごとに高まり続けている。いずれは応えなければならない情勢にはあるわけであ

り、同時にわが国における研究者層の拡充と研究水準の向上が求められることになる。

この学際領域に関する研究は、実状としては、土木計画、建築計画、都市計画、造園計画等個別の専門領域においてもすでに数多くみられるが、必ずしも相互の情報交換が活発に行われていたとはいえない面がある。

人間の生活環境の質的向上を、社会資本整備の中心的目標に据える時代に入ったわが国において、こうした領域への関心と理解を深めていく必要があることは確かであり、土木のソフト化の一面を強化する重要な基礎を形成することになるだろう。今後開催されるこの種の会議に土木からも積極的に参加されることを期待して筆を置くことにしたい。